変動のさなかにおける家族と家族のおこなう教育

―― 伊波普猷と比嘉春潮を事例に考える ――

仲　嶺　政　光

（富山大学地域連携推進機構生涯学習部門准教授）

數名の理髪師が入り口に現はれた……この混雑中に窓から飛んで逃げたのもゐた。宮古島から來た一學生は切るのを拒んだ。何とかいふ先生が無理矢理に切らうとしたらこの男、簪を武器にして手ひどく抵抗した。あちこちですすり泣きの聲も聞えた。一二時間經つと、沖縄の中學には、一人のチヨン髷も見えないやうになつた[1)]。

本稿は、沖縄学者として著名な伊波普猷と比嘉春潮の生育歴をうかがい、学校教育とは相対的に独自の領域を形成する家族のおこなう教育[2)]の、近代沖縄における政治的変動の激しい時期――日清戦争以前、両国のいずれに帰属するのかをめぐる混乱期――におけるありようについて分析するものである。伊波・比嘉の両者とも沖縄士族を出自とし、自伝・評伝が多く残されているのが特徴的であり、同時代士族層の家族と家族のおこなう教育を考える上で重要な事例としてみることができる。

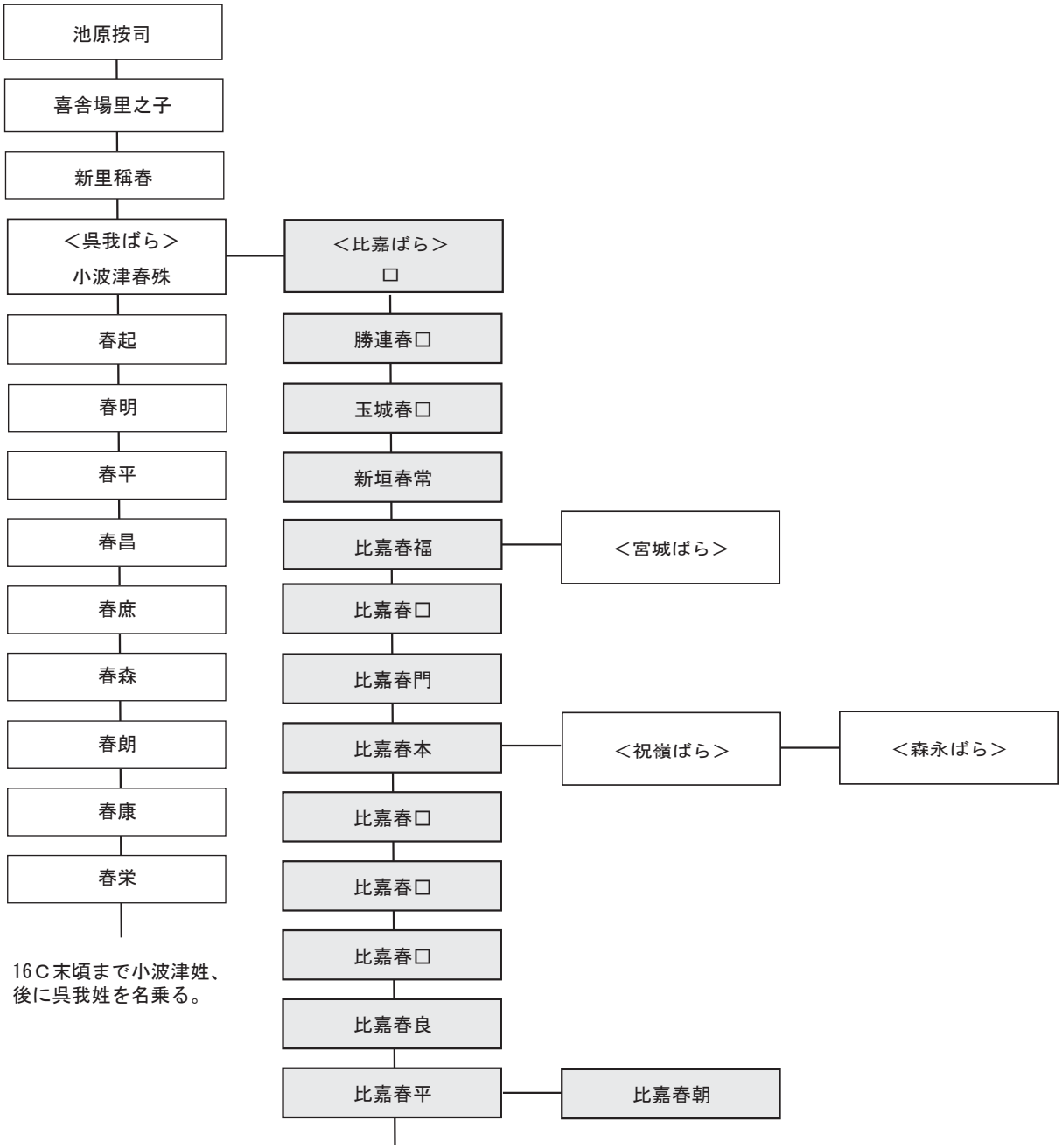
彼らの家族をみていく上で重要な観点は、琉球王国が明治政府のもとに組み込まれる過程で、沖縄士族の階級的再生産に決定的な危機が訪れ、新しい産育・教育状況のもとに置かれるようになったこと、その状況変化に対し家族と共同体にどのような反応がみられたのか、ということである。18世紀後半ごろから国学を頂点とする沖縄の旧学校制度が整備され、官職登用を目指した士族層の家族のおこなう産育・教育への関心が高まりをみせていた。彼らは「大和文化・中国文化・沖縄の独自文化などさまざまな文化を習得する必要があった」[3)]。これに対し琉球処分以後は旧来の学校体系が明治政府の推進する新しい学校体系へと移行されていく。以下では、沖縄士族の家族と共同体は、この新しい学校制度をどのように受けとめ、対処していったのか、ということについて考察を進めていく。

1．沖縄士族と門中

伊波によれば、彼の祖先は中国の医師で、「日本の日向」を経てその三代目の子孫が沖縄読谷（よみたん）にたどりついた。さらにその子孫が那覇に移住し「出世」を果たすことになった。そして伊波の祖父普薫の代にいたり中国との貿易で財を築き「伊波村の地頭」にもなった。普薫は名誉職「御物城」の候補者にまでのぼりつめたが、琉球処分によりそれはかなわなかった[4)]。それでも、彼の精力的な働きのおかげで伊波の家は経済的な豊かさを確保することができた。

比嘉は民俗学的な論考の中で自身の親族のことを詳しく記している。そこで、ここではまず最初に比嘉の自叙伝と、彼の出自である旧士族の周辺についての歴史的・民俗学的研究を参照した後、成育史環境の特徴についてみていく。以下、少し時代をさかのぼって比嘉の祖先、ならびに彼の所属する士族の親族共同体である門中（ムンチュウ）についてみていくことにしよう。

図１　駱氏門中の系統図



※この図は、比嘉春潮「首里の門中と祭祀」『民間伝承』日本民俗學會、16 巻 9 号、1952 年 5 月（『比嘉春潮全集』３巻所収）、および『那覇市史』資料編第１巻５、家譜資料、那覇市企画部市史編集室、1976 年、96～97 頁、伊禮春一編『琉球家紋系図・宝鑑――甦がえった琉球の家紋』２版、沖縄家紋研究会、琉研、1992 年、9 頁をもとに作成した駱氏門中の系統図である。始祖である池原按司は、当初佐敷（沖縄本島南部の地名）を領し、墓もそこにあった。その後、子孫は 15 世紀末頃に琉球国王尚真の中央集権政策によって首里に移住したものとみられている。按司とは 11 世紀ごろからあらわれた地方小領主である。駱姓（唐名）は、1689 年、系図座設置の際に賜ったもので、男性構成員は共通して名乗頭「春」を冠している。姓はある時期までは官職の種類・職務上の事情により変化した。例えば比嘉ばらの１～４代目までは一定ではない。

門中についての概略は以下のようになる。「島津の琉球入り」（1609 年）以後の琉球統治政策によって士農分離が奨励され、17 世紀中には士族の父系血縁共同体・門中が成立してくる。1689 年には系図座が設置され、そこに家譜を提出し出自を確認することによって士族として認定されるなど制度的な整備もすすむ。「一旦系図が出来上ると、以後は門中であることの確認には、この系図が物を云うようになってくる」[5]。なお、その際に門中には中国姓が付与される。例えば伊波の門中は「魚」、比嘉の門中は「駱」の名をもつ。

今知り得る限りでもっとも古い比嘉の祖先は、沖縄本島南部の佐敷を領した池原按司である（按司は官職名、地方小領主をさす）。その池原按司の直系から 17 世紀初頭に分家した家が比嘉の家族の祖となったという。駱氏を冠する門中は一つの親族集団としてのまとまりをなし、またその中には本家筋・分家筋を区別する呼称がある。例えば比嘉家の直系家族は「比嘉ばら」と呼称される。比嘉は初代から数えて 13 代目になるとされるが、ここにいたり、「駱氏」門中として一族を構成する範囲は、池原按司以来の長男筋、そして分家筋である比嘉ばら、さらに比嘉ばらから分家した三つの系統があり、合計で五つの家々で構成されると比嘉は説明している（**図 1** 参照）。

小川徹氏は、沖縄の士族門中の慣行について、以下の８つの特徴があるとしている。(1) 士族門中は家譜を所持している。(2) 共同の門中墓、(3) 位牌をもつ。(4) 祖先祭祀をおこなう。(5) 父系嫡男が相続をおこない、女性には相続権はない。(6) 養取は、同じ門中にておこなう原則をもつ。(7) 嫡子押込（チャクシウシクミ）・兄弟重合（チョーデーカサバイ）の禁忌、すなわち次男以下の男子成員（と女性）の家督相続、ならびに同じ仏壇の中に兄弟の位牌が並立することをタブーとする。(8) 門中の呼称がある。門中制度の浸透が進み、これらの特徴が実質的に規制力を強めていく。例えば他系より養子をとることの忌避は近現代より強まったとされる[6]。

もっとも、このように士族として認定されることは、ただちに彼らの特権的な生活を保障するものではなかった。とくにその下層に位置する多くのものは、階級的な卓越性を保持する上で危機的局面を抱え続けてきたといってよい。これは、一方で彼らは官職に登用されぬ限り基本的に無禄であったこと、そして他方で官職をめざす者の数に対して登用の数が僅少であったからである。このため、一般的に彼らの地位上昇の機会はせまく、生活困難な士族が都落ちすることになる。これに対して、1732 年には士族が商工業に転ずることが奨励されるなどしている[7]。

こうした沖縄士族の官職への就職難の様相は、1879 年の琉球処分（沖縄廃藩置県）により明治国家の一地方として組み込まれた後にも続く。例えば琉球処分による階層再編成の際に沖縄出身者が官吏として登用される割合は少なく[8]、一部の上層[9] を例外として多くは無禄となった士族たちは「職を失って巷にはんらんし」、「「哀れつれなさや廃藩の士族、笠に顔隠くち（かくして）馬小曳ちゆさ（馬を曳いているよ）」と、百姓からも憫笑されていた」[10]。「駱氏門中は旧藩時代は殆ど全部が首里の山川町を中心に住んでいたが、廃藩（明治十二年）という社会的変革で、多くは首里を離れることになり、明治の中頃には大部分は沖縄の各地方に散らばつて住むようになつていた」[11]。

このような危機に直面しながら沖縄士族によって展開された諸戦略を、ここでやや図式的に整理すれば、以下のようになる。

まず第一に、単独相続によって家産の分散・縮小を防ぐという、相続戦略をあげることができる。支配層においては、1600 年代前半には単独相続制が、1700 年代前半には長子単独相続制が確立したとされる[12]。まず、士族は相続人を見いだせなかった場合は王府からの数々の恩典が消失するため、世継ぎの出生は重要な条件とされた[13]。さらに、基本的には無禄であり少ない土地と家屋の他にはほとんど資産をもたず、「居住人」、つまり〈失業→都落ち・農業〉というルートをたどる者が少なくなかったといわれる下級士族にとって、分割相続は厳重に避ける必要があったといえるだろう。

他方、家や門中の格は、官職への登用や上昇の機会に関係し、家譜は「一種の身分保証の魔力」（比嘉政夫氏）をもつものであった[14]。家譜には始祖をはじめとする子孫たちが記録され、正本は系図座に提出し、副本は本家が所有した。制度上、分家により家族が分節化する場合、その家の家譜を新たに系図座へ提出することも可能であった。ところが一般に傍系は、家譜を分かつことを避け、長男筋家族と結合することで没落が回避され、「次男以下の分家という形は少なくとも公式的には現れなかった」といわれる[15]。より下層にあっては、そもそも客観的な経済的貧困から分家不能な場合もあり、必然的な結合の形式としてこれをみることもできる。琉球処分の前後には次男以下の分家が困難であったため、父親の兄弟の代まで含んだ拡大家族のケースもよくみられたという[16]。

第二は、前項と関わるが、結婚統制（奥野彦六郎氏）があげられる。「〔上層家庭では〕まったく不自由婚におちいっていた、その結婚には地域的な制限こそなかったが、彼等の間では私的性愛に走れば、少なくとも近代ではかの部落の対外制裁に似たような取扱いを受けた」[17]。比嘉は「財産をもつている者はなるべく同姓から探して、ほかの者には譲りたくないというなにかがある」と共同体的な結合の強さがあったことを述べている[18]。士族の門中では、制度上「同姓不婚」などの禁止事項が定められるなどされたが、しかし琉球処分以後系図座が廃止されるとこれが崩壊し[19]、物質的・象徴的な価値を手にするための戦略に基づいて配偶者の選択がおこなわれようになっていく。いずれにせよ、士族の配偶者選択はたいていは親を中心とした親族によって原則的に差配されていたことはかわりない。むろん、そこでは当事者の恋愛感情が優先されるべき事項となる余地などなく（「妻を娶るなら血統を訊せ」）、「恋愛は不義であった」[20]。そして女性たちは「深窓の生活」を強いられ外出の際にも傘をさして歩くなどして入念に管理された[21]。

第三は、教育戦略とでもいうべきものである。これは、以前ならば官僚登用にむけて、琉球処分以後日本の学校が整備された後にはそれを利用しての、立身出世をはたすことをめざした教育を施すものである。これには、比嘉の自叙伝に見られるように、都落ちしようとも首里士族たちのふるまいかた、つまり「士分」として生きるように厳格なしつけがなされるというような、訓育的側面も含まれる。

これらの諸戦略は、門中の慣行の担い手となるべく、性別や出生順位に応じて差別化されたアイデンティティを各人に刻み込みながら、親族構造の再生産を志向し永続をめざすものとして、相互にわかちがたい関連をもつものであったといえるだろう[22]。まず、家内の権力的ヒエラルキーの上では、家長と、原則的な次期家長候補者である長男はともに特権的な位置を占める。例えば、きょうだい関係をみた場合、長男は優遇され、次男以下や女性たちは彼ら二人に敬意をはらわねばならなかった。次男以下は家長と長男に挨拶をするのがしきたりであるとされ、食事をとる場所も、食事の中身も差別化されていた[23]。

また、名づけは各人のアイデンティティがいかなるものかを喚起させるものであった。既にみたように、門中は「唐名（からな）」とよばれる中国姓をもち、士族であることを明らかにする。そして男性の構成員には名前に共通の「名乗頭」を冠する慣行によって一つの門中への所属と他との境界が明瞭になされる。例えば比嘉の所属する門中は「駱」という名をもち、そこに所属する男性構成員は名前の頭に「春」をもつ。姓は官職・任地などにより変化し、門中内での統一性もなかったが、琉球処分以後は固定化する[24]。比嘉の門中のように、門中内の各分家筋ごとにすべて異なる姓がある場合は、姓により分節ごとの区別がなされることになる。さらに、元服などで改名がおこなわれる以前には近い祖先と同じ童名が名づけられるが、世継ぎを予定した長男には祖父の、長女には祖母の童名が名づけられる場合がよくあった[25]。このようにして、最初の人生儀礼である名づけは、所属する父系血縁団の歴史にほぼ依拠され、成員に対しては家の歴史と、その体系上のどこに自己が位置するかをただちに想起させるものとなっている。名乗り頭、姓、童名は、それぞれどの門中の（始祖は誰か）、どこに（ど

の分節に属するか)、どういう形で埋め込まれているか（長男長女かそれ以外か)、ということを明白化するのである。

新しい家が創出されて七代目をむかえると、女性･男性の二柱、すなわち「をなり神」と「ゑけり神」の二神を立てるというしきたりがある。比嘉家の場合、第七代比嘉春門（1710-1790）までに男女各六柱の霊が三十三年忌を済ませており、最初の二人の神が立った。以後比嘉家からの分家筋は、宗家ではなく比嘉の神を拝むようになっており、遠縁となった本流よりもより近い小宗家の神が儀礼の中心になる。それまで宗家に所属していた分家の神は、七代を経て遅れて分離独立することになる。大本の宗家との関係は象徴的な意味のみが取り残される。これを反映してか、比嘉の青年時代の日記の中には、呉我姓を名乗る宗家のメンバーはもはや一人として登場しない。始祖である按司の墓を共有する宗家・呉我ばらとの儀礼的関係が完全に消滅するわけではないが、分家を完了した家に新しい神が生まれることは、「とりもなおさず祖霊の分家」であるとされたため距離が生まれる。そしてこれは時代を経るに従いさらにその分家筋には傍系の家族が育ち、七代を数えてまた新たに自らの神の誕生をみることになり、傍系たちはその神を崇拝し、元の宗家からの独立も完了する。このように門中の中に組み込まれた家族の系統は延々と続いていくものとされた。

神にはそれぞれ生誕の日があり、三年、七年、十三年、二十五年、三十三年ごとに生誕祝いをし、以後同様に三十三年毎に「生れ更る」。この家の神に仕える女性が一門から選出され、これはクディ〔祈る人〕と称する[26)]。

門中を親族共同体として存在させる精神的な一体性の基礎の一つは、この祖霊を共有しているということで得られるものである。その中には「祖霊の分家」のように、たいていは数世紀以上にもおよぶ長期的サイクルに対し、三十三年を一つの周期とする中期的サイクル、あるいは年中行事などの毎年ごとにおこなわれる短期的サイクルの諸儀礼がある。これは琉球処分以後、旧王府から離散した成員にしばしば集いの場を提供し、個々の家族が孤立することを防止したものである。長短おりまぜたスパンをもつこの一連の儀礼のサイクルは、一人の人間には通観を許さず、それこそ延々と存続すべきものとして固く語り継がれ、容易に操作しうるものではない、という形をとる。祭祀の運営上のヘゲモニーは宗家筋の義務に属し、他の傍系の家族からは人数に応じて祭祀の費用を徴収する。先に述べたように、長男に対しては位牌と墓の管理とを引き替えに単独相続がなされ、次三男はその恩恵に浴することはできず、ましてや女性に対してはその機会が決して訪れないという俚諺もある（「女は十人子どもを生んでも、家はない」)。

2．士族としての生育

さて、ここまでの説明は旧沖縄士族の親族共同体である門中の概略を示したものであるが、以下では具体的に、比嘉の自叙伝を中心として彼の成育史と家族の様子を追ってみることにしよう。その中で、日本社会への統合・再編と急激な近代化の波をこうむった沖縄士族の家族と共同体の反応がどのようなものだったか、ということの一端について考えてみることにしたい。

比嘉は、1883 年 1 月 9 日、沖縄県西原間切翁長村[27)] にて、没落士族の次男として生まれた（ほかに姉ナベ 1876 年生、兄春平 1878 年生がいる)。

比嘉の祖父は大屋筆者（比嘉の説明によれば執事の下僚程度の役職）の職につき、父春良も王府首里にて役人をしていた。父母ともに首里の出身である。ところが比嘉の父春良は琉球処分により失職して西原間切へと都落ちし、そこで掟加勢という役所の事務処理的な職業につく。生活状況は、月給一円五十銭のほか住宅と畑三百坪、これに月何度か耕作等の労役をおこなう農夫と人夫がつき、また

きょうだい三人に一人ずつ子守もついた。納税は免除された。比嘉はこの生活水準を、村内での「中等以上の生活」と表現している。しかし比嘉は別の箇所で日当四銭の賃金を支給される者に対し周囲が「そのうちにたいへんな富豪になるにちがいないとうわさし合った」としており、比嘉の家が地域では相当に高い生活水準であったことを示唆している[28)]。

ところで、琉球処分の後、沖縄士族内部では今後日清両国のいずれに帰属するかということをめぐる対立が、基本的に日清戦争の終結をみるまで続くことになった。比嘉の父は「頑固党」、すなわち親清派に傾いていたとされる（反対に親日派は「開化党」と呼ばれた）。ゆえに比嘉の父親は比嘉やその兄春平に対しては旧来的な官僚登用制度での成功を期して漢学のテキストを用いて教育をおこないつつ、旧王府の風俗をたたき込んでいた。また、片髪（カタカシラ）は、その頭髪にさす簪（かんざし）の種類によって階級的属性を象徴するものであったため、こだわりの深いものだった。後に見るように日常的な言語使用についても、都落ちした先での話し方は旧王府風のものへと矯正される。琉球処分の後ある時期まで、彼らのように都落ちした旧士族子弟の最大の理想は、なお旧王府首里へと返り咲くことであったという。

この意味で1895年の日清戦争の終結は、比嘉の自叙伝や研究作品の中では、沖縄士族にとってきわめて衝撃的な事件であり、その後の劇的転換の契機をなしたものと表現されている。

▲日清戦争わ沖縄の社会に大きな衝撃お与えた。従来《日本を父とし支那お母とする》いわゆる両属の国だと考えていた沖縄人の中にわ明治政府の新施設お喜ばないものもあり、縣内にわ絶えず思想の動揺があつたが、日清戦争の結果わ、日本の優越、支那の頼むべからざることお的確にこれらの徒に認識せしめ、相当潜勢力お持つていた支那崇拝熱が急に冷却してしまつた。沖縄の社会があらゆる方面において面目お改め方向お変える気運がこの時に生じたが、日本語が真に社会の底面まで浸潤しはじめたのもこの時であつた[29)]。

▲戦争は日本の大勝利に終わった……清国にはもはや琉球救援の意図も全く無く、またその力もないことが決定的となり、頑固党の夢は完全に破れ去り、県下の人心も初めて統一を見た感じであった[30)]。

▲『琉球新報』が日本の戦勝を伝えてもそれはウソだと嘲笑した。県民の中にも半信半疑で不安に思うのもいた。台湾接収のため多数の軍艦が中城湾に集結して、初めて清国の敗戦が明らかになり、さすがの頑固党も迷夢から醒めた[31)]。

▲戦争は日本の大勝に終り……頑固派もすっかり目が醒め、沖縄は初めて真の「大和世」になった[32)]。

比嘉の自叙伝ではまた、自身の身につけた古い文化的慣習や日常語である琉球方言と、日本の学校体験との間に生じた食い違いをめぐる悲喜劇のエピソードが示され、言語的・文化的葛藤の経験が強調されるのも叙述上の特徴である。

▲さて、学校の科目は読本、作文、習字、そろばん、体操が主で、読本は読書入門という教科書であったが、もっぱら〝普通語〟の翻訳であった。鳩はホートゥ、鳥はトゥイ、葉はファー、蟹はガニのことであるという具合。日本語の訓練という意味もあった……一年の時、教室の前に運動場があり、その先はたんぼで水が張ってあった。毎度の「右向けオイッ」のミギはてっきりミジ＝水のことと私はおぼえこんでしまった。二年になったら教室がかわって入口は裏庭に向くようになり、左側に池があった。先生はいつもの通り「右向け」とやったのだが、私は得々として水の方すなわち池の方に向いた。私はその時はじめてミギという大和口（日本語）が水でなく右だということを知った……入学前にわれわれは家庭で父から古い時代の教育を受けた。いくつのころからか、兄と一緒にまず漢文の「道徳経」「三字経」をやり、続いて「小学」をやり、巻の二の初めまでやったところで小学校へあがった……旧教育でいけば小学から論語、孟子、すなわち四書へあがるところを、私たちは新教育法によったため「小学」どまりとなったが、それでも七歳の子どもとしては漢字の知識など学校で

も群をぬいていた。ひとえに父の教育方針（廃藩となっても士分として育てるという）によるものであったろう。なにしろ「首里士族」であるわれわれは西原生まれではあっても他の地元の平民とはちがう身分だというはかない誇りがあったらしい。両親はことば遣いにもとくにきびしく、われわれが西原なまりを使うと、ひどく叱られ、アクセントについてもやかましく直され干渉された。当時首里人で地方に住む〝居住人〟〔没落士族〕にとって、最大の理想は「立身出世」してまた首里へもどることであった。われわれには、首里に親戚があり、そこの子どもたちにとって、われわれは、いうなればカントリー・カズン（田舎の従兄弟）であるから、やや見下げる風がほの見え、こちらもまたコムプレックスを持っていたのでなおさら首里風俗を見習うことを心がけた[33]。

▲私の身の上にとんでもないことが起こった。平常は行儀のよい生徒である私が主事の原田先生に大変怒られた。事の起こりは、私の算術か作文の帳面の表紙に、光緒何年何月と支那の年号を書いてあるのを見付けられた。家では父がよくそう書くので何の気なしに書いたのであったが、放課後兄と一緒に呼びつけられて、お前たちは敵ちゃんちゃんの味方かと二、三時間も叱られた。言いわけもできないで、二人とも泣いたのでやっと放免された[34]。

このような比嘉の叙述は、自らの家が親清派＝頑固党の立場から出発し、以後劇的な転身を遂げたことを深く実感していたことを意味している。実際彼は父親の真似をして中国の元号を用いるなどしていた。青年時代の比嘉の日記でも、頑固 - 開化対立について是非を一方的に断ずるような理解の仕方を避ける記述がみられる。

▲開化頑固、孰れが非、孰れが是なりしか、予は知らず、只開化派は所謂賢なりしなるべし。正邪は論ずべからず、賢愚はわれこれを知る（1908.9.17）[35]

3．日和見的な家族のおこなう教育

以上のことを念頭におきながら、次に、琉球処分以後、従来の社会的・文化的価値が決定的危機を迎えていた中で、比嘉の家族がどのような動きをみせたのかということについて考えてみたい。まず、ここで二つの注目すべき事実が確認できる。一つは頑固派とされた比嘉の父親が、難色を示しながらも、妻とその弟のすすめを受け入れ、1889 年に子弟を日本の学校に就学させていること、そしてもう一つは、その就学と同時に、読みかけだったにもかかわらず「小学」という漢学テキストを用いることが放棄されたことである。というのも、先に引用した述懐をふりかえってみると、比嘉は琉球読みの「三字経」を経た後、日本語読みをおこなうはじめてのテキストである「小学」に接するが、それは「巻の二の初め」で中断しているからである。

ただ、確かに比嘉の父が日本の学校への就学に難色を示していたのは事実である。

▲髷を切ったのは、高等科二年の中頃、日清戦争の終わったあとです。風のあたり具合が変なので、風呂敷をかぶったりしましたよ……旧士族の誇りが忘れられない父は、髪を切るぐらいなら、学校へなど行くなといっていました。ええ、父は昔の育ちでしたから、新しい世の中を認めたくなかったのです。廃藩になって、自分がよい身分から落とされていますし……日本の直轄になったから、今の世の中は、こんなふうなんだ。なにこれは一時的であって、もう何年かすれば昔のようになる。だから、日本の教育なんか受けんでいい。子供たちの学問は自分が教えると頑張っていました……日清戦争の時、頑固党は自分たちの救援に、清国の黄色軍艦がやってくると空頼みしていました。父はそういう人たちの影響を受けて、思想的には保守派の頑固党でした。けれども、

母には先見の明があり、父の意見に反対してくれました……母がなぜそういう考えになったかというと、母の弟である島袋慶持の影響です。この叔父はなかなかの出来物でした。昔の沖縄では最上級の学校である、首里の「国学」に学んでいたのですが、廃藩になって学校はダメになる。叔父は、もう自分には役人になる資格はなくなった。これからは新しい学問をしなければいかんといっていました。叔父は母に進めて、わたくしたちを小学校に入学させたのです。いいえ、姉は学校には行きません。女は教育を受けるもんじゃない。まだそうした時代でした。新しい教育を受けることができたこと、私は本当に幸いだったと思います。母は九つのときに死にましたが、母方の叔父のお蔭で、わたくしは日本の教育を続けることができました[36]。

琉球処分の衝撃は、旧学校体系における最高学府での勉学が無に帰したと実感した比嘉の叔父・島袋と同様、比嘉の父親なりに強く受けとめざるを得ないところがあったはずである。何より、比嘉の父親は琉球処分により王府の官職を失って都落ちした存在なのであり、比嘉の幼名は、通常の士族のもの（樽金など）ではなく、庶民層と同じもの（樽）が名づけられているところにもそのような転落の意識をうかがうことができるようにみえる[37]。比嘉の父親は、自らの境遇や周囲の動向をふまえながら、既に漢学的教養の価値が危ういことをどこかで実感していたからこそ、その教授を中断したに違いない。

後年歴史家として活躍した比嘉が一貫して持ち続けた、士族層の日清戦争前後における革命的な断絶意識は、一見親世代の生き方との大きな隔たりがあったことをもわれわれに訴えかけるものである。そして彼の自叙伝における父親は、新世代には理解しづらい異人のような存在として描かれる。というのも、比嘉の自叙伝における父親は、旧習に固執していた面が強調されるからである。比嘉の自叙伝においては、自らの父親が、妻や義弟による就学の提案に対し家長として一蹴することをしていないことに注目しないし、その「開化」的な教育方針を結局のところ容認し、子弟への漢学教育を中断した事実に家族の戦略転換を読み取ることはない。しかもそれらはいずれも日清戦争終結以前に比嘉の家族によって決断されたことだったにも関わらず、である。

おそらく、日清戦争終結以前の当時、子弟の学校就学をどうするかの問題は、日清いずれに帰属するかがまだ明白ではなかったとすれば、比嘉の家族にとってはかなりの迷いと緊張をともなうものであった。このことが比嘉の家族を、父母が子弟の教育に対し対照的な態度をとる日和見的な教育戦略にむかわせることになる。学校就学を断固として拒否することは、もし日本への帰属が決定的になれば就学が遅れてしまう。実際長男春平の就学年齢はとうに過ぎている。既に自身が琉球処分のあおりを食らっている以上、子弟の就学を拒絶することがもたらす失敗の可能性は大である。佐藤冬樹氏によれば、「地域の混乱は〔日清戦争〕開戦後ひと月あまりで収まり、「頑固党」の活動も慎ましかった……すでに彼らにはリアルポリティクスに関与する力はなかった」[38] とされ、親清派は政治イデオロギーのよりどころが脆弱な側面もあった。とはいえ、積極的に日本風に転身した後に、万が一清への帰属が決定した場合や、あるいはそうでなくても、後でみるように、せっかちな転身の様を周囲に見せることは共同体的な美徳に反するし、旧来の価値体系への造反的な行為として受け取られかねない。極端な選択はいずれの場合も危険な賭であった。先行きの見えぬ過渡期的状況の中に置かれた比嘉の父親が、新しい日本の教育制度を積極的に奨励しようとせずに振る舞い、しかし他面ではそれを容認するという両面的な態度を示したのは、難しい状況に直面したためにとった自然な成り行きであったといえよう。

この過程で、比嘉の父親は、明晰な意識や計算のもとに行動することができたわけではないだろう。自らの官職喪失と都落ち、子弟の学校就学、そして子弟の元服＝片髪結いとその後の断髪などは、どれも比嘉の父親にとってはきわめて短い間にむかえることになった劇的な事態であった。比嘉の父親

は日本の学校に入学することを黙認することはできたが、「士分」という階級意識と、最大の階級的象徴である片髪へのこだわりをすべていっぺんに捨てることはできなかった。そんな父親の態度に、比嘉は異人の姿を見たのであろう。

鹿野政直氏は、日本の学校に就学させるにあたり、旧士族の父親がそれにやや反対する態度をとり、むしろ〈賢明な母〉の方のはたらきによってそれが実現される、という言説が伊波その他の人物に見られることに着目している[39]。これは比嘉の家の場合と同じ対処のしかたである。「私〔伊波〕の母は子供をこのまゝにして置くのは將來の爲に善くないといふことに氣がついて、學校に出す氣になつた。父はこの意見には餘り賛成しなかつたが、母が獨斷で明治十九年の三月に師範學校の附屬小學校に入校願を出した」「當時男子は自暴自棄になつて、すべてのことに無關心であつたに拘らず、女子はかうして絶えず世の中の動きを見てゐたらしい。この問題〔学校就学のこと〕に就いても、父は氣乗りしなかつたらしい」[40]。このように、伊波の父親は開化党よりの人物であったにも関わらず、なぜか頑固党シンパであった比嘉の父親と同様に日本の学校への就学に抵抗感を示している。金城芳子氏によれば、「廃藩置県から七年、旧来の村学校では三字経、二十四孝、小学、大学、中庸と教える教育に熱心し、近代の学校に子弟をやりたがらない風潮も首里･那覇の知識層の間では一般的だった」という[41]。比嘉は、「何か新しいものに無条件に追従するのをいさぎよしとしない気持ちがあった」と述べており[42]、父親の両面価値志向を共有する面があった。これをみると、彼ら士族男性の日本の学校への就学を忌避する態度は一定の層に広がりをもつ特徴であったということになる。子弟への漢学教育の推進は伝統的に父親ないし旧来の学校や漢学塾が担ってきたものであるが、それへのこだわりが琉球処分以後も継続したのは、Ｐ．ブルデューのいうハビトゥスの履歴効果（ヒステリシス）――「以前の状態に対応していた知覚・評価カテゴリーを、肩書市場の新しい状態にそのまま適用しようとする……彼らは自分に与えられた肩書の価値が下落しても、そこに客観的には認められていない別の価値を与えようとする」[43]、すなわち、状況の変化に対応できず古い規範や価値観を保持しようとする慣性力学――によるものであり、そのことが、子弟に対しまるで異人のような姿を演出させていたのではないか、と思われるのである。

さらに鹿野氏は、伊波の母親が息子の就学を決断し行動したことについて、次のような二つの解釈をおこなっている。一つは、「沖縄では夫が女狂ひをすると妻は神事に関係をもつ様になるのであります。母もさうだったのでありませう」という伊波の記述を引用しながら、彼の母親が「一種の霊力の持主」であったことが、日本の学校への就学を実現するための「精神の集中力･決断力が培われた」とするものである。そして二つには、「夫が世替わりに適応しかねているのをみつつ、マツル〔＝伊波の母親の名〕は、新しい時代での生き残りの方途を、あるいは本能的であったかも知れないにせよ、把握して」いたことである。

この中で、沖縄の女性の神憑り的気質と子弟の学校就学を推進する動きとを架橋しようとする鹿野氏の解釈は興味深い。ここではさらに踏み込んで、両性の行動の大きな相異がどのように生みだされていたのか、ということについて考えてみたい。

伊波の父親にしろ比嘉の父親にしろ、一見したところ子弟の教育上の近代化に何らの役割も担っていないかのようであるが、果たしてそうだろうか。私には、頑固－開化対立がある程度残存し、また前述のハビトゥスの履歴効果により漢学的教養と旧官僚体制を尊ぶ価値観を捨て去ることのできない人びとが広く旧士族層の間に存在していたであろう当時において、日本の学校への就学という難しい選択にあたるに際しての適任者は、家長ではなく、霊力のような摩訶不思議な能力、あるいは「年に二三度神がかり」するなどの奇態をたびたび演じるような属性があてがわれた女性たちに一任されることになった、という同時代の性秩序に由来していたことのように思える。その女性側の役割像は少

年時代の伊波に強烈な印象を与えるものであった。

▲母は年に二三度神がかりをしました。それは怖しいもので、坐つてふるひ出すと蒼くなり、目は一點をにらみ、やゝあつて唄の調子で、律語のやうなのを語り出すのであります。勿論對句になつてゐます。かく神語を律語で語ることをウジヤシユンといひます。那覇でも神がかりや口よせなどがあるのをみました[44]。

その意味では、子弟の学校就学は「女は戦の魁（イナゴーイクサヌサチバイ）」の俚諺を体現するかのような役割がもっぱら女性たちによって担われたのではないか、ということである。先にも述べたように、当時、旧来の学校や官僚登用制度を経験した者が周囲に多くいた以上、日本的な要素にすりよりを見せることはきわめて奇抜なものと受けとめられ、かつ批判的なまなざしを向けられるものであった。これについては再び伊波の述べるところに耳を傾けることにしよう。

▲十五歳になつたばかりの私の叔父が、相談なしに大やまと（東京）に連れて行かれたので、祖父は世間から裏切り者と呼ばれた。
▲彼〔叔父〕の断髪姿が珍らしいので、之を見ようとして、遠近から大勢の人が押寄せて來た……彼は断髪姿で外出しては危險だといふので、數ヶ月經つて髪の毛が延びた時、又昔の様に髪を結ひ、それからは毎日親戚朋友の家を訪れて、東京の話などをしてゐた。
▲一日外出してゐた母が、歸つて來るや否や、「みせゞる」（神託）でも受けたかのやうに、これからの人間は、さういふ〔漢学の〕本ばかり読んでゐては間に合はないから、學校に這入るやうにしなければいけないといつた。
▲私達は間もなく強制的に丁髷をきられたが、この日親戚の者が大勢集まつて來て悲しんだ。とりわけ伯父はしくしく泣いたが、多分一昔前の弟〔伊波の叔父〕の事件を聯想した爲であつたらう[45]。
▲〔叔父が上京したことに対し〕世間の悪口屋は許田の家では子供を高價で日本人に賣つたなぞといつてゐた。
▲かういふ事件〔叔父の上京〕があつた爲に、私の親類は自然新しい文明に對して恐怖心を懷くやうになつた。私の家なぞは少し廣すぎたに拘はらず、内地人には一切間を貸さないことにした。そして私の家では私達が言ふことを聞かない場合には「アレ日本人（ヤマトンチュー）ドー」といつて、私達を威すのであつた。
▲私はろくに外出なぞはさせられなかつたので、何處に學校があるかといふことさへも知らずにゐた。ずつと後になつて、漸く學校のあることには氣がついたが、さういふ所に這入らうといふ氣にはなれなかつた。
▲とにかく當時の沖縄の男子で子供の教育なぞのことを考へるものは一人もなかつた。
▲世間ではまだ寝小便をする位の小供を〔伊波の就学の都合で〕手離して人に預けるのは惨酷であるといつて、私の兩親を非難したとのことだ。
▲師範生等が、靴をはき、鐵砲をかついで、中隊教練をやり始めたら、口さがなき京童は、「鐵砲かためて靴くまち、親の不幸やならんかや」と歌つて、彼等を嘲つた。暫くして、師範生中で桑江（元の佐敷校長）奥平（菓子屋の主人）等五六名のものが斷髪したら、世間の人から賣國奴として罵られた。
▲或時私は本校生の眞似をして、靴を買つてはいたら、あの子供は今に斷髪するだらう、といつてそしられた[46]。

このような風潮の中、学校就学や断髪などの日本風のものへのすりより、そのことによる利潤追求に家長男性が率先し、転身の早すぎる様を周囲に見せることは好ましくないものと受けとめられたことだろう。故に、学校就学の手はずを整える役割は〈賢明な母〉、つまりそれをおこなった際に予期せぬまずい事態を迎えたとしても、そのことを容易に否認することができるように、家長や家格の名誉や尊厳を傷つける危険性が相対的に少ない女性たちによって推進され、そして他方、父親などの男性たちは無関心か、不満な態度をとることが担われる、そのような公言されることのない巧妙な性別

役割分担の一断面をみることができるのではないか、ということである[47]。そうだとすれば、伊波や比嘉の父親はむしろ拒否すべきところ、そうでないところを使い分け、旧習を庇い守ろうとする異人の存在を周囲に同調しながらうまく演じていることになる。すると、次にみる伝統芸能の訓練や、通常よりも早められた元服の行事などは、守旧派家族のあらわれというよりも、むしろ家族のとった日和見的な教育戦略のぬかりのなさこそを示しているものに他ならない、ということになる。

▲私は父春良（天保十一年生）と伯父〔叔父〕島袋慶持（安政五年生）から（父も伯父も生粋の首里人で父は外間さんより十五歳くらいの年長､伯父は外間さんと同年配）私の十歳のころから組踊や琉歌の読み方を教わり、また明治の中期までは日常生活では首里語だけを使った[48]。

このような階級的教育に学校就学を勧めた比嘉の叔父である島袋が参加しているのは何故だろうか。比嘉はここで父親と叔父を「生っ粋の首里人」と但し書きをしている。この叔父は、姉である比嘉の母親に対して日本の学校への就学をすべきだと進言し、そして就学を果たした後には、姉婿＝比嘉の父親と共に甥たちに首里人士としてのたしなみを教えているのである。この叔父の一見したところ首尾一貫性のない行動は、彼がおそらく前述の性別役割分担の機微というものをよく知っており、学校就学という危険な方面のことは基本的に女性である母親が進めるべきだとする判断があったことに起因するものだろう。他方比嘉の父親は、将来の栄達にとっておそらく不要になるであろう漢学教育については中断することを決したが、しかし学校制度の革新や変動とは基本的に関係ないと思えた首里人士としての日常的作法やたしなみに関してはなおも教えておかねばならないと判断するような、家族のおこなう教育における伝達内容の仕分けがなされているようにみえるのである。

続いて、片髪についてもみてみよう。「諸士はカタカシラユーキと称し一五才の春に挙式する定めであるが多くは一三才頃挙式し、一五才の春王府に届け出る」ものとされた[49]。

▲実は古い習慣に従えば、子どもたちには幼名があり、十五歳ぐらいになって名を改める、その時に髪を片かしらに結うのが、普通である。いわゆる元服と同じ風習である。私の場合幼名タルー（樽）、改名して春潮となるのだが、時代の波が激しく押し寄せるのが目に見えていたので、人びとは常よりも早ばやと子どもに髪を結わせ、名前もつけたのであった。片かしらへの執着は、古い琉球温存への最後のあがきであった。私の家でも父は髪を切るぐらいなら学校へ行くなという意見であったが、これから学問をするためにはと納得させたものだ。それが明治二十八年。今まで頭にのっかっていた「真結い」のまげがなくなった時の気持は忘れられない。床屋で切りおとしてもらったまげの毛を持って帰宅の道を〔は〕風のあたり具合がどうも変で、手でさわられるような妙な感じがして風呂敷をかぶって歩いたものだ。これからの新しい世の中に生きるものは断髪をしなくてはならないという自負心と、気恥ずかしい気持とがごちゃごちゃに入り混じっていた[50]。

このように片髪を結う時期を早めることが、比嘉の言うように一定層の「人々」によって担われるような一般的な動向だったとすれば、先に述べたように、当時は学校就学か否かの両方の道のいずれかに没頭も放棄もしえないような状況にあっただろう。これは推測的解釈になるが、「時代の波」により元服が早められたのは、新しい学校制度が一般化することで断髪が当たり前の世の中になるのではないか、という予感を抱きながらのことだったのではないだろうか。比嘉の主著『沖縄の歴史』では、次のようなかたちで当時の風潮が紹介されている。

▲都会地である那覇の小学生ははるかにおくれて明治二十八年にようやく断髪した。小学生の断髪は大体が教師

の勧誘、むしろ強制によるもので、一般社会特に士族の家庭ではまだまだこれに対して反撥的態度を持していた[51]。

比嘉の家族は、ここに見るような「士族の家庭」の一つであることになるが、これは「髪を切るぐらいなら」という条件つきのものなのであり、日本の学校制度じたいに反発しているものではないことは注意すべきである。「髪を切るぐらいなら学校へ行くな」というように、比嘉の父親が固執していたのは、何より簪の種類という、階級の象徴がきわめて可視的であり、変化があまりにも露骨であったためなのであろう。比嘉の自叙伝では、日本の学校が、比嘉の父親自身の経験からして既往の価値体系とは異なる制度でありながら、子弟を参入させることを容認しつつ、しかし元来十五歳で執り行う人生儀礼である元服＝片髪結いを八歳（1891 年）という早い段階でほどこし、首里人士としてのたしなみも教授するなど、他方の道も捨ててはおかないことの、仕分けされた二つの態度の区別が自覚的に強調されることはない。しかし比嘉の父親のこの態度は、近い将来に出るであろう政治的決着のいずれにも対応しうるものであったことは重要である。このように比嘉の父親は頑固派の「迷夢」にとりつかれた存在の一人として描かれながら、単なる守旧派としては理解できない側面をかいまみせているのである。

比嘉と比嘉の兄が、どういういきさつで片髪を切り落としたのか、比嘉の自叙伝には食い違いがありはっきりしない。先の引用の中では床屋で、すなわち自発的に切り落としたということだが、しかし他方では学校で切り落とされたという記述があるからである[52]。描写の具体性からして、おそらくは前者が事実だったのかも知れない。しかしいずれにせよはっきりしていることは、日清戦争の終結は、それまでに胎動していた家族の着実な準備態勢に一つの帰結を与える、最後の大きなひきがねであった、ということである。1895 年、比嘉兄弟の断髪は日清戦争の結果が出た後であることから、子弟には大きな抵抗もなくおこなわれた。比嘉の断髪よりわずか 4 年前、中学にいた伊波の級友らの大騒動の様子と比較すると、七歳違いの比嘉の周囲にはもはや、比嘉の家族のような新旧両面的価値を維持しようとするぬかりのない人々が多く、ある程度は落ちついて断髪を迎える態度が子弟にも父母にも培われていたのではないか、と思わせるものがある。冒頭でも紹介したが、伊波の断髪についての様子は次の通りである。

▲頑固黨の子供らしい者が、一二名叩頭をして出ていつた。父兄に相談して來ます、といつて出ていつたのもあつた。暫らくすると、數名の理髪師が入り口に現はれた……この混雑中に窓から飛んで逃げたのもゐた。宮古島から來た一學生は切るのを拒んだ。何とかいふ先生が無理矢理に切らうとしたらこの男、簪を武器にして手ひどく抵抗した。あちこちですすり泣きの聲も聞えた。一二時間經つと、沖縄の中學には、一人のチヨン髷も見えないやうになつた……この時斷髪した者の中で、父兄の反對にあつて、退校して髪を生やしたのも二三名ゐた……私の友達に阿波連といふ者がゐたが、之が爲に煩悶して死んだ[53]。

「二年以上の生徒は大方斷髪してゐた」にもかかわらず、このような騒動が展開されたものであるが、比嘉の自叙伝では周囲にも抵抗した者がいたとする記述はない。ともあれ、比嘉はそれを機会に「着るものも変わ」り、琉球風の帯の前結びもやめる。そのとき親族中では誰も断髪をおこなっていなかったため、「二、三年の間は正月や盆の親戚回りもやらなかった」[54]、と述べている。このようにして、親世代は共同体的な規範を常に意識しながら子弟に対する家族のおこなう教育を新時代に適応させていくのであった。

親の世代では不確定な状況に対し日和見的で慎重な対処をみせるものだったが、新世代である子弟

たちはより積極的な体勢をとる。彼ら兄弟は伝統的な価値観を放棄することに幾分とまどいながらも、日本の学校制度へと本格的に志すことを決意した。彼らにとって断髪は、片髪を早期に結うことと同様に、新時代への参入を宣する一種の通過儀礼の意味合いをもつものだったといえるだろう。そして日清戦争の開戦中であるにも関わらず、当時師範学校附属小学校高等科にいた比嘉は、いつしか、級友たちと頑固党のものたちを愚弄してみせる程度のことは既にできる態度を持つに至っていた。

▲私が附属校に居たころまでは、廃藩当時からの開化派、頑固派の対立が相当に激しく、特に日清戦争になると、頑固派は今度こそ清国が勝って再び「沖縄世になる」と期待し、朔日十五日には礼装して、隊を組んで社寺に詣でて「大清国の勝利」を祈願した。この隊列が円覚寺に詣でるために堂々と附属校の前を通ると、吾々生徒は待ち構えて大声で「グワンクー、グワンクー」（頑固者）と嘲り笑うのであった[55]。

比嘉がどこで断髪をしようと、そのことに幾分のとまどいを見せようと、他方でこのような態度を見せる彼を、最早頑固派の精神を受け継ぎ、「黄色い軍艦」の救援に期待をかける子弟であるとみなすことはできない。しかも、比嘉の家族が子弟の断髪を決行し、旧慣を破ることに対して親族の中では相対的に最も迅速で積極的であった事実は注目される。沖縄学者の一人、東恩納寛惇の次のような述懐は的確であるように思える。かつて「日清戦争頃までは実の処或一派の人々に取つては首を切るのと髷を切るのと何れと云ふ位の大問題であった」。しかしながら、比嘉の父母のとった行動の対照性、あるいはその子弟が片髪などの象徴的特徴を捨て去るに際し、違和感以上の意味を見いだせないことを考えると、「世の中の事はすべて慣れるまでの問題である」[56]、ということになるのである。

4．挫折と復活

比嘉の家族が、世代的なズレを伴いながらも、このように潜在的なかたちで新社会への順応の動きを見せていたという解釈が正しいとすれば、この兄弟がうけた幼少時の階級的な教育と学校就学以後の接続が、比嘉が断絶的側面を強く感じていたわりに、実際は円滑なものだったのではないか、ということへの一つの説明が得られる。すなわち、父親や叔父らの熱心な教育態度に接することによって、日本の学校に適応する力を身につけていたのではないか、ということである。実際、この兄弟は同年で就学した小学校では常に一、二位の成績をほこり、学校での「行儀」もよかった。また、彼ら兄弟の住む中頭郡（沖縄本島中部）には普天間（ふてんま）という地域に一カ所だけ高等小学校が設立されていたが、それゆえに「吾々の子供の頃は中頭の中心が普天間にあるような氣がした」というような、新しい教育制度のもとにあった上級学校の存在が意識された地理感覚も形成されていることがうかがえる[57]。さらに、先に引用した比嘉の回顧によれば、彼は「右」のことを「水（ミジ）」と覚えてしまい、体操のまわれ右の号令に対し一人だけ「得々として水の方」すなわち左を向いたとする。しかもその時の「水」は田圃ではなく池であった。この誤動作は、学校的な場面において自らの判断に瞬時に応用を交え（「威勢よく」[58]）、しかもこれを躊躇なく主張（「得々と」）しうるというような、自らの振る舞い方というものに対する自信と、積極的な性向を示しているものではないかと考えられるのである。

そして管見では、比嘉の自叙伝の中では、両親が長男である兄春平に対して偏愛を示したとする記述は一切ないが、このことが事実であれば、これもまたこの家族の新しい戦略の一端を示すものと考えられる。すなわち、当時の士族門中の慣行上、家督相続は厳格に嫡男に帰せられる事実であったとしても、学校的な成功によりかつての次男以下の働き以上のものが期待できるものとすれば、分家不能の事態によって長男筋を頼り、その見返りとして家の労働に従事するなどといった伝統的な結合の

形式は、明らかにふさわしいものではなくなっていた。次男以下は、学校就学の後に近代的な労働市場において定収入を約束され、十分な自立の経済的条件を満たしつつあったと考えられるからである。実際、比嘉は兄弟そろって卓越した学業成績を達成しつつあり、そうなる可能性は高い。それならむしろ、出生順位にもとづく差別的で地位志向的な待遇を抑え、子弟に対し平等志向へのシフトを強めることで相続慣行上排除的な位置におかれた次男以下の感情的な葛藤を最小限にとどめ、分家の後にも直系への恭順の意識を失わないようつとめながら、彼らによる将来の様々な助力を期待する方が最善の道である、というわけである。

こうして、当時は就学の必要がないとされた女性である姉ナベをのぞく比嘉家の二人の兄弟は、中等教育段階まで進学することになった。この兄弟は地元の小学校を卒業し、1893年に首里の沖縄師範学校附属小学校高等科へ入学した後、兄春平は師範学校を卒業して小学校教員となり、比嘉は沖縄県尋常中学校へ無試験で進学する。

ところが、ここで一つの転機が訪れる。比嘉は中学二年へ進級する際に、制服のかたちをバカにされ登校拒否をおこし、さらには、制服を新調するためにと父親がようやく工面した三円を道中で落としてしまい、1898年退学を余儀なくされる。このことについて後年の比嘉は、「子どものころには、どうして貧しいということをそんなにも屈辱に思うのだろうか」と自問している[59]。この一件に悔恨の感情が強くあったのか、比嘉の自叙伝には中学就学中の一年間の記述がほとんどない。

▲最後の望みも消え果て、私のぶらぶら生活が始まった。翌年、西原翁長から首里大中へ引き移り、家で真綿つむぎをやったり乱読にふけったりした。今のようにどこの家庭でも子供の雑誌や本を買える時代ではなかった。祖母方の親戚にあたる汀志良次（てぃしらじ）の内間はかなりハイカラな趣味を持っている家で、私は小さいときからそこでとっている新聞「万朝報」や少年雑誌「日本の少年」を借りて読んだし、伊江御殿で、会計係にあたる〝下代〟をしている叔父がもらい下げてくる「少年園」などを読んだ。学校の教科書は、南風原出の同期生稲福君から借りて写し取って使っていた[60]。

周囲の同輩たちに制服のかたちを嘲笑（年譜によれば「上級生からからかわれ」たとしている）[61]されたことは、比嘉にあっては「たいへんなショックだった。もうそれだけでとても学校へ出る気がなくなった」[62]という。このような比嘉の感情は、一つには彼の言うように、経済的格差を喚起させられたことによる羞恥心の大きさがある。そして二つには、そうした羞恥心の大きさの背景として、彼の学校就学の中に新旧入り交じった階級・階層的上昇へむけての生真面目な態度と高い意欲をくじかれたことがあった。中学無試験入学などといった比嘉の個人的な事情も、彼のプライドを高いものにしていたことだろう。比嘉は、新しい学校制度に参入してくる他の旧士族の子弟たちとの間に排他的な競合意識を感じていた。以下にみるように、高等小学校時代の述懐では、同じ士族でも「貴族階級」子弟の上流意識はすさまじく、「鼻息の荒さはたいへんなものだった」。近代化過渡の時代に生まれ育った比嘉には、貧窮の境遇を開き直ることはできなかった。なぜなら彼は、〈首里への返り咲き〉という父親の夢を受け継ぎつつ、前代階級・階層的な対立を内に含んだ学校への順応を生真面目にめざしていたため、彼らから受けた「嘲笑」の意味が重くのしかかったからである。彼ら旧貴族階級子弟が地方の人間を見下す態度は教師－生徒間関係にすら及んでおり、「訓導でも教生でも彼らには敬意を表し、言葉遣いからちがえて対し」たり、離島出身の教員が侮られるなどの逆転現象すらみられたものである。

▲〔教生が慶良間（けらま）＝離島出身だったことから〕首里の生徒たちが「ケラマー」と呼んで、軽侮し、ある時みんな

で胴上げしたあげく、いやがらせにわざと手をはなして、地べたにしたたか頭を叩きつけたこともあった……あるとき田舎出の少年が髪結いに行ってきれいに結いあげてきたところ、「百姓のくせに」となぐられてしまった話、首里には士族だが零落して芋つくりになっている層の人びとがあったが……狭い道で、田舎者が首里の学校に通うとは生意気と、肥えたごをぶちまけた話、そういうエピソードは数限りなかった[63]。

比嘉の中学退学の前、沖縄県区制・郡制の二勅令の公布により旧慣地方制度が改正されたことで、1896年、父春良は失業していた。役職に伴って支給された土地家屋と、他に別の土地を所有することはできたものの、本来ならこのような家計危機の折に内職の担い手として期待されたはずの母親は1892年に既に死去しており、それこそ「たいへんな貧乏」を迎えることになったという。

比嘉はその後、真綿つむぎの内職や土地整理（沖縄の地租改正、1898 − 1903）の測量の補助をして賃金を得ながら、首里に住居をうつし父親とともに生活をいとなむ。期間にして三年ほどのあいだを、「ぶらぶら生活」と自ら称するその生活は、学校的成功の軌道から脱落しながらも、比嘉の勤勉ぶりをよく表現するものとなっている。彼は当時教職に就いていた兄の家や、ハイカラな親戚の家などで新聞や雑誌を読みながら栄達を夢み、また友人から教科書を借りて写本したりしながら常に学校に意識をおいている様をみせているからである。

こうして見る限り、放蕩な生活とはほど遠い生活ぶりにみえる。これを自己批判のかたちで表現する比嘉には、当時既に師範学校を卒業し就職していた兄から援助を受けていたことに対する負い目もあったことだろう。しかし彼のように就学をはたせず、かといって若くして無為に過ごすことを周囲は許容しない。比嘉の自叙伝での回想では次のような叙述がある。

▲沖縄では十八、九になっても学校にも行かず、仕事にもつかずぶらぶらしていると「なかびなむん」といわれて世間からつまはじきにされた ……〔私は〕ぶらぶらと十九歳になってしまった[64]。

周囲がはなった「なかびぬむん」という批判は、定職のない者（故にこの場合は男性を示している）のほか、なかなか縁談の整わない女性の意味もあった[65]。しかも当時、比嘉のおこなっていた「真綿つむぎ」は、旧体制の崩壊により没落し、展望を見いだせない男性たちにかわって女性たちの担った役目である。男性を主軸とした労働市場を形成する社会の中にあっては、この言葉の両義性は、きわめて効果的な批判を加え、早期の社会復帰を比嘉にうながすことになる。すなわち、職なしの状態に対して女性的な属性を喚起させ、その対である男性としての不完全性を指摘するがゆえに、よりいっそう就学・就労への義務感をおこさせるからである。そしてほどなく比嘉は速成教員養成所である男子講習科（1901年）、さらに師範学校に入学（1902年）し、小学校教員になり（1906年）、早々と社会復帰をなしとげた。この間、師範学校入学に際しては親族が「一方ならず尽力し」[66]、さらに在学中にあっては兄が経済的な面や処世術の面でサポートをおこなっていた。

「没落した士族」と自称する比嘉は、このようにして、前代階級・階層における意味での栄達を学校就学による立身へと軌道変更し、一度は失敗しながらもまた復活する。師範学校では充実した学業生活が展開されたようで、自叙伝でのその四年間の青春期は生き生きとしたものとして描写される。なかでも交友関係においては、四人の優秀な同輩とともに「隠然たる勢力をなしていた」とする回想、キリスト教や文学との出会い、英語学習の経験などなど、実に中学退学のころのような孤独さは彼には見られず、学校生活を謳歌していた様を読みとることができる。経済的理由で断念したとされるが、そこでの優秀さが認められたせいか「東京の物理学校（今の東京理科大学）への入学資格」も得ていたと言われる[67]。ともあれ師範卒業後小学校教員を奉職することになった比嘉は、土地整理、日露戦争、

海外移民の隆盛などの過程をながめつつ、旧体制の中で生きた親の世代とは隔絶したものを体感するようになる[68]。

5．引き裂かれた家族

伊波は1876年3月15日、琉球藩那覇西村の裕福な家の長男としてうまれた。ここでは、前節までにみた比嘉の家族的背景と対比しながら、両者の相異と共通する点をそれぞれうかがっていきたい。

既に述べたように、比嘉の家は都落ちした先である西原村翁長では相対的にかなり恵まれた経済的境遇のもとにあったが、同じ士族であったとはいえ、伊波の場合はこの面で別世界である。掟加勢であった比嘉の父親の月給が一円五十銭であったのに対し、小学校時代の伊波は寄宿先と家の往来にしばしば人力車を用い、「高い車賃を拂つて。ママ 之に乗つた車賃は確か片路で廿六錢であつた」[69] と述べており、両者の経済的な格差は途方もないものだったことがみてとれる。このような背景に基づくものであろうが、比嘉の家では〈首里への返り咲き〉、すなわち王府という土地と官職への登用か否かということへのこだわりが強かったが、財力のある伊波の家は必ずしもそうではなく、鹿野政直氏の述べるところによれば、「貿易に従事する背景も素地もあった……士族であったものの、富裕な商家の性格を色濃くもつ家であった」[70]。

これに加えて、両家は政治的なスタンスも対照的であった。先にみたように比嘉の父は頑固派の考え方に傾いていたが、伊波の父は「開化党（いわば親日派）の有力者の一人」[71] であったという。「父が酔つぱらふと、盛んに大和口（やまとぐち）〔日本語〕をしかけられて、困らされたものだ」[72]。また、伊波の叔父である許田普益は「開化党に属し、薩摩などの在藩奉行に使われて、中国をよりどころとして信奉していた頑固党などのメンバーの動向をさぐってはそれを報告する探訪人（スパイ）として働いていた」[73]。すなわち両者はその志向する政治的な方向性が正反対であるばかりでなく、その参与の積極性や関わりの深さも異なっていたといえる。

このことと位相を同じくする相異点として、伊波と比嘉の沖縄県尋常中学校退学のいきさつをあげることができる。既にみたように比嘉の退学は経済的な理由が主だったが、伊波の場合は異なっている。伊波は、中学在学中の児玉喜八校長の横暴――英語科を廃止しようとしたり、生徒から人望の厚かった教師二名を解雇した――に反発した有志らの誘いを受け、全校規模に及んだストライキ事件の首謀者五人のうちの一人となり、その結果1895年11月14日、退学処分となった。伊波らはその後も校長排斥運動を継続し、マスメディアや文部大臣宛に訴えを起こす一方、「同志倶樂部」を組織していく。伊波らのこの運動は家族からの理解や支援もあり、「私の父は同志倶樂部の維持費にしろ、といつて、金六圓を寄附した」[74]。比屋根照夫氏によれば、このストライキ事件は「そのスケールの大きさ、期間の異常な長さ、動員された生徒の数などいずれをとってみてもかつてない出来事であった」[75]とされ、最終的には児玉校長を辞任に追い込んだ。その後伊波は明治義会尋常中学校に編入（1897年卒）、京都三高（1903年卒）を経て東京帝国大学で言語学などを学び、卒業した後に沖縄に帰郷した（1906年）。東京帝大在学中には最初の結婚をしたとされる[76]。

このような伊波の経歴と比較すると、比嘉の学校へのこだわりの強さという点がうかびあがる。というのも、伊波の中学退学は校長排斥のための自発的な動機があり、その後父からの支援を受けるなど家族もまた彼の決断を支持するものだった。これに対し比嘉の場合、貧困という境遇から名誉を傷つけられ登校不能になるなど、やむを得ず中学から退いており、その後も教科書を写本して学校からの離脱に強く抵抗し続けているからである。比嘉が伊波と最初に出会ったのは彼が師範学校在学中のときであった。人類学者鳥居龍蔵の沖縄調査に同行していた伊波は師範学校で講演をおこなったが、

そこにちょうど生徒の一人として居合わせた比嘉は伊波を尊敬と羨望のまなざしで見つめていた。

▲えらい人だなあと思いました。大学を卒業して文学士になったのは、伊波先生が沖縄人では始めてでした。わたくしも大人になったら学問をやろう。大学にはいることは、自分は貧乏だからできないが、一生懸命勉強して、あんな学者になりたいなあと……あの時分、わたくしたちが学問や学者というものに対して抱いた、信仰的景仰というものは、たぶん今の人には、理解できないでしょうね。現在では、だれでもが大学生になる。あの頃、沖縄で大学生になったのは、伊波先生一人だけですもの、ハハハハ……[77]

伊波と比嘉の家族の類似点についてもみていこう。まず第一に、両者ともに熱心な伝統的漢学教育から出発しながら、途中で日本の学校へ就学するという路線転換がなされたことがあげられる。この点は、両家族の教育戦略を考える上できわめて重要な転換であった。日本語を用いる新しい教育制度を前にして、伝統的な言語と教養が立身と直接のつながりを持たなくなったからである。そして、両者ともに旧王府首里の貴族階級子弟との確執があったことも共通している。比嘉の場合については先にみたが、伊波もまた同じような経験をしている。

▲はじめて學校に行つて變に感じたのは、生徒の言葉遣ひや風習が那覇と異なつてゐることであつた。當時はまだ階級制度の餘風が遺つてゐて、貴族の子は平民の子を輕蔑したものだ。かういふ所へ私のやうな他所者が這入つたからたまらない、彼等はいつも私を那覇人（ナーファー）々々々といつて冷かした……かういふ風であつたから、最初の間首里の學校生活は愉快ではなかつた[78]。

これとやや関連するが、第二に、政治的な立場は正反対であったにも関わらず、父親が日本の学校に就学することに難色を示し、〈賢明な母〉の力でそれが実現されている点があげられる。これは父母の教育態度が一致しない状態を示すものであるが、このことは、前述した通り日清戦争以前における家族の一時的な日和見的教育戦略のあらわれとみることができる。家族のおこなう教育の一つとしての日和見的な教育戦略は、周囲に根深く残存していた共同体的な規範と歩調を合わせつつ、しかし戦争の結果がいずれになろうとも対処可能な態度とみることができる。その反面、これは子弟との文化的距離感を深める結果をもたらすことになる。例えば先にみたように、伊波にしろ比嘉にしろ父はある意味で異人のような存在である。このように世代が分断されることは、子弟が新しい時代の第一世代として成長し、家族の持つ文化的環境に鋭い亀裂が走り、従って伊波も比嘉も、幼少期に慣れ親しんだ、親世代が築いた古い家族と全く同じかたちを再生産することが不可能になったことを意味している。両者は後になって、伝統と近代のはざまにおかれ、家族とはなにか、その出発点である結婚とはなにか、という人生論的なテーマに取り組まねばならない境遇を体験することになるのである。比嘉の青年時代の日記からは、彼の家族が新旧二つの世代に引き裂かれ、ノスタルジックなものとして意味づけられている様をうかがうことができる。

▲津嘉山様の母様の御親切なるもてなし、沁々と感じ、亡き母のことなど思ひ出して暗涙に咽びき（1908.8.18）。
▲なき母の事、首里に父と共にありしときのことなど思ひ出されて、淋しく悲しく、久しく机下に手をこまねきぬ（1908.9.18）。
▲今晩の様に寒いときには、よく父と二人西原の破屋にをったことを思ひだす……思ふと、何だか、今にも父の声が僕に聞こえる様になる……ああ父よ、母よ、僕に今父や母があったらどんなに嬉しからう（1910.1.17）[79]。

注

1）伊波普猷「私の子供時分」『龍文』沖縄県師範学校附属小学校創立四十周年記念誌、1921 年、42 ～ 43 頁、『伊波普猷全集』10 巻、97 頁。
2）中内敏夫「家族と家族のおこなう教育――日本･十七世紀～二十世紀」『一橋論叢』97 巻 4 号、1987 年 4 月。
3）浅野誠『沖縄県の教育史』思文閣出版、1991 年、123 ～ 125 頁。
4）伊波普猷『古琉球』青磁社、1942 年、356 ～ 360 頁、『伊波普猷全集』 1 巻、335 ～ 338 頁。
5）渡口真清「系図と門中」『沖縄文化論叢』第 3 巻民俗編Ⅱ、平凡社、1971 年、465 頁。
6）小川徹『近世沖縄の民俗史』弘文堂、1987 年、120 ～ 128 頁、比嘉政夫『女性優位と男系原理――沖縄の民俗社会構造』凱風社、1987 年、25 頁。
7）高良倉吉『御教条の世界』ひるぎ社、1982 年、39 ～ 41 頁。
8）比嘉春潮・霜多正次・新里恵二『沖縄』岩波新書、1963 年、134 頁。
9）比嘉春潮『沖縄の歴史』沖縄タイムス社、1959 年、410 頁、『比嘉春潮全集』 1 巻、410 頁。廃藩置県後、金禄支給がおこなわれた三六〇人余をさす。ちなみにこれは他府県よりも優遇された措置がとられたと比嘉は説明している。
10）比嘉春潮・霜多正次・新里恵二『沖縄』前掲、135 頁、比嘉春潮『沖縄の歴史』前掲、411 頁、『比嘉春潮全集』 1 巻、411 頁。
11）比嘉春潮「首里の門中と祭祀」『民間傳承』日本民俗學會、第 16 巻第 5 号、1952 年 5 月、3 頁、『比嘉春潮全集』 3 巻、221 頁。
12）菊山正明「近世期沖縄における相続制についての一考察」『沖縄文化』沖縄文化協会、第 51 号、1979 年 3 月、22 ～ 23 頁。
13）源武雄「婚姻」『那覇市史』資料編二巻中の七、那覇市企画部市史編集室、1979 年、570 頁。
14）比嘉政夫『沖縄の門中と村落祭祀』三一書房、1983 年、32 頁。
15）比嘉政男『沖縄の門中と村落祭祀』前掲、31 頁。
16）比嘉政夫「親族組織」『那覇市史』資料編二巻中の七、前掲、69 ～ 70 頁。
17）奥野彦六郎『沖縄婚姻史』国書刊行会、1978 年、113 頁。
18）座談会「沖縄」『民間傳承』民間傳承刊行会、第 20 巻第 8 号、1956 年 8 月、10 頁、『比嘉春潮全集』 3 巻、343 頁。
19）比嘉政夫『沖縄の門中と村落祭祀』前掲、83 頁。
20）比嘉春潮「通過儀礼」『日本民俗学大系』平凡社、第 12 巻、1959 年、92 頁、『比嘉春潮全集』 3 巻、34 頁。
21）源武雄「婚姻」『那覇市史』資料編二巻中の七、前掲、572 頁。
22）Ｐ．ブルデュー〔今村仁司他訳〕『実践感覚』 2 、みすず書房、1990 年、30 頁参照。ブルデューは結婚戦略について、結婚の規則（＝客観的側面）や、打算的な決定（＝主観的側面）のいずれかに決定づけられるものではなく、それら両面を含んだ行為者のハビトゥスに依拠するものであると解釈し、また相続戦略や産児、教育戦略などと切り離せない再生産戦略の一つとして位置づけている。
23）比嘉政夫「親族組織」『那覇市史』資料編二巻中の七、前掲、70 ～ 71 頁。
24）琉球政府文化財保護委員会監修『沖縄文化史辞典』東京堂出版、1972 年、287、371 ～ 372 頁。
25）源武雄「産育」『那覇市史』資料編二巻中の七、前掲、560 ～ 561、567 頁。
26）名嘉真宜勝「葬制」『那覇市史』資料編二巻中の七、前掲、642 頁、比嘉春潮「首里の門中と祭祀」『民間傳承』前掲、4 ～ 5 頁、『比嘉春潮全集』 3 巻、223 頁。
27）「間切」は伝統的な行政区分であり、1896 年の郡区制施行により中頭郡西原村となった。宮城栄昌・高宮広衛編『沖縄歴史地図』柏書房、1983 年、139 頁。
28）比嘉春潮『沖縄の歳月――自伝的回想から』中公新書、1969 年、3 ～ 4 頁、『比嘉春潮全集』 4 巻、183 ～ 184 頁、比嘉春潮へのインタビュー「明治老人の魂魄――沖縄は長男、台湾は次男、朝鮮は三男」『中国』中国の会編、徳間書店、1972 年 3 月号、第 100 号、7 頁、『比嘉春潮全集』 5 巻、589 頁。
29）比嘉春潮「琉球語とその変化」『国際語研究』フロント社、13 号、1935 年 10 月、52 頁、『比嘉春潮全集』 3 巻、377 ～ 378 頁。

30）比嘉春潮『沖縄の歴史』前掲、436 ～ 437 頁、『比嘉春潮全集』 1 巻、436 ～ 437 頁。
31）比嘉春潮「わがはたちの頃」『沖縄タイムス』1965 年 1 月 15 日、 1 面、『比嘉春潮全集』 4 巻、170 頁。
32）比嘉春潮「ふるい時代の思い出」『東京龍潭会会報』東京龍潭会、1967 年 11 月、22 頁、『比嘉春潮全集』 4 巻、178 頁。
33）比嘉春潮『沖縄の歳月――自伝的回想から』前掲、5 ～ 7 頁、『比嘉春潮全集』 4 巻、185 ～ 187 頁。
34）比嘉春潮「沖縄の明治百年」『比嘉春潮全集』 2 巻、282 ～ 283 頁。
35）『大洋子の日録』と題する比嘉の日記。原本は沖縄県立図書館蔵、『比嘉春潮全集』 5 巻に収録、39 頁。
36）比嘉春潮へのインタビュー「明治老人の魂魄――沖縄は長男、台湾は次男、朝鮮は三男」『中国』中国の会編、徳間書店、1972 年 3 月号、第 100 号、8 ～ 9 頁、『比嘉春潮全集』 5 巻、590 ～ 591 頁。
37）源武雄「産育」『那覇市史』資料編二巻中の七、前掲、568 頁参照。幼名は、接頭語（思、小、武など）や接尾語（金など）をつけることによって階級を象徴する。例えば農民なら「樽」、一般的な士族なら「樽金」「小樽金」「武樽金」、さらに上層になると、「思樽金」「真加戸樽」「思武樽金」「真如古樽」「万寿樽」となる。
38）佐藤冬樹「「日清戦争と沖縄社会」再考」『あめく通信』第 3 号、琉球新報新聞博物館、2006 年 2 月、3 頁。
39）鹿野政直『沖縄の淵――伊波普猷とその時代』岩波現代文庫、2018（初出 1993）年、6 ～ 8 頁。
40）伊波普猷「私の子供時分」『龍文』沖縄県師範学校附属小学校創立四十周年記念誌、1921 年、37 頁、『伊波普猷全集』10 巻、91 頁、同「チエムバレン先生と琉球語」『国語と国文学』東京帝國大學國語國文學会編、至文堂、第 12 巻第 4 号、1935 年 4 月、231 頁、『伊波普猷全集』 8 巻、570 頁。
41）金城芳子『なはをんな一代記』沖縄タイムス社、1977 年、168 頁。
42）比嘉春潮『沖縄の歳月――自伝的回想から』前掲、14 頁、『比嘉春潮全集』 4 巻、193 ～ 194 頁。
43）Ｐ．ブルデュー〔石井洋二郎訳〕『ディスタンクシオン――社会的判断力批判』Ｉ、藤原書店、1990 年、218 頁。
44）伊波普猷の挨拶「沖縄の午後――開會の辭・伊波普猷氏挨拶・座談」第二回日本民俗學講習會座談記録『民俗座談』民間傳承の會、1937 年、69 頁、『伊波普猷全集』11 巻、389 頁。
45）伊波普猷「チエムバレン先生と琉球語」『国語と国文学』東京帝國大學國語國文學会編、至文堂、第 12 巻第 4 号、1935 年 4 月、229 ～ 232 頁、『伊波普猷全集』 8 巻、568 ～ 571 頁。
46）伊波普猷「私の子供時分」『龍文』前掲、35 ～ 41 頁、『伊波普猷全集』10 巻、90 ～ 95 頁。
47）このような解釈を進めるにあたり、Ｐ．ブルデュー〔今村仁司他訳〕『実践感覚』2、前掲、43 頁に示唆を受けた。
48）比嘉春潮「再び「出様ちゃる者や」について――当間一郎氏に答える（下）」『琉球新報』1965 年 9 月 9 日 8 面、『比嘉春潮全集』 4 巻、136 頁。
49）琉球政府文化財保護委員会監修『沖縄文化史辞典』前掲、89 頁。
50）比嘉春潮『沖縄の歳月――自伝的回想から』前掲、15 ～ 16 頁、『比嘉春潮全集』 4 巻、194 ～ 195 頁。
51）比嘉春潮『沖縄の歴史』前掲、437 頁、『比嘉春潮全集』 1 巻、437 頁。
52）比嘉春潮「伊波先生の思い出」(2)『沖縄タイムス』1958 年 10 月 7 日、8 面、『比嘉春潮全集』 5 巻、542 頁。
53）伊波普猷「私の子供時分」『龍文』前掲、42 ～ 43 頁、『伊波普猷全集』10 巻、97 頁。
54）比嘉春潮「伊波先生の思い出」(2)『沖縄タイムス』1958 年 10 月 7 日、8 面、『比嘉春潮全集』 5 巻、542 頁。
55）比嘉春潮「ふるい時代の思い出」『東京龍潭会会報』東京龍潭会、1967 年 11 月、22 頁、『比嘉春潮全集』 4 巻、177 頁。
56）東恩納寛惇「偉大なる二十五年間」『東恩納寛惇全集』 8 巻、第一書房、1980 年、219 頁（初出 1936 年）。
57）比嘉春潮「ありし日の中頭」『おきなわ』第 1 巻第 3 号、おきなわ社、1950 年 6 月、21 頁、『比嘉春潮全集』 4 巻、162 頁。
58）比嘉春潮「沖縄の明治百年」『比嘉春潮全集』 2 巻、282 頁。
59）比嘉春潮『沖縄の歳月――自伝的回想から』前掲、17 頁、『比嘉春潮全集』 4 巻、196 頁。
60）比嘉春潮『沖縄の歳月――自伝的回想から』前掲、17 ～ 18 頁、『比嘉春潮全集』 4 巻、196 ～ 197 頁。
61）『比嘉春潮全集』 4 巻所収の年譜、424 頁。
62）比嘉春潮『沖縄の歳月――自伝的回想から』前掲、17 頁、『比嘉春潮全集』 4 巻、196 頁。
63）比嘉春潮『沖縄の歳月――自伝的回想から』前掲、12 ～ 13 頁、『比嘉春潮全集』 4 巻、191 ～ 193 頁。
64）比嘉春潮『沖縄の歳月――自伝的回想から』前掲、19 頁、『比嘉春潮全集』 4 巻、198 頁。

65）比嘉春潮「翁長舊事談（三）」『島』「島」發行所、一誠社、1934 年 5 月、506 頁、『比嘉春潮全集』３巻、206 頁。
66）『比嘉春潮全集』４巻所収の年譜、425 頁にその記述がある。
67）石川正通「春潮曼陀羅」『沖縄文化』沖縄文化協会、56 号、1976 年 10 月、37 頁。
68）比嘉春潮『沖縄の歳月――自伝的回想から』前掲、19 ～ 30 頁、『比嘉春潮全集』４巻、198 ～ 213 頁。
69）伊波普猷「私の子供時分」『龍文』前掲、39 頁、『伊波普猷全集』10 巻、94 頁。
70）鹿野政直『沖縄の淵――伊波普猷とその時代』前掲、2 ～ 3 頁。
71）金城正篤・高良倉吉〔新訂版〕『「沖縄学」の父　伊波普猷』清水書院、2017 年（初出 1972 年）、16 頁。
72）伊波普猷『琉球古今記』刀江書院、1926 年、600 頁、『伊波普猷全集』７巻、366 頁。
73）中根学『人間・普猷――思索の流れと啓蒙家の夢』沖縄タイムス社、1999 年、160 ～ 161 頁。
74）伊波普猷『琉球古今記』前掲、614 頁、『伊波普猷全集』７巻、373 頁。
75）比屋根照夫『近代日本と伊波普猷』三一書房、1981 年、40 頁。
76）鹿野政直『沖縄の淵――伊波普猷とその時代』前掲、80 頁。伊波と松村マウシとの結婚生活については伊佐眞一『沖縄と日本の間で』下、琉球新報社、104 ～ 134 頁に詳しいいきさつが述べられている。
77）比嘉春潮へのインタビュー「明治老人の魂魄――沖縄は長男、台湾は次男、朝鮮は三男」『中国』前掲、11 頁、『比嘉春潮全集』５巻、595 頁。
78）伊波普猷「私の子供時分」『龍文』前掲、38 頁、『伊波普猷全集』10 巻、93 頁。
79）『大洋子の日録』、『比嘉春潮全集』５巻、40、103 頁。